

[↓ ログイン前の続きから読む](#)

身長2m秋広、まだまだ伸びしろだらけ 高校時代、「規格外」の育成方針 プロ野球・巨人

会員記事

2021年3月14日 5時00分



9日のソフトバンク戦で、適時内野安打を放つ巨人の秋広＝日刊スポーツ



巨人の高卒新人、秋広優人内野手(18、東京・二松学舎大付)は身長2メートルで、しなやかな打撃と軽快な守備を見せる。その身のこなしは高校での3年間で大きく影響しているという。広島の前監督も教えた二松学舎大付の市原勝人監督(56)に聞いた。

↓ここから続き

千葉県船橋市出身の秋広は高校に入学した当初でも身長198センチ、体重87キロ。スパイクのサイズは、34センチで特注と規格外だった。

市原監督は「背が高いから投手もさせたら面白いよ、と聞いていた。でも、体はまだ細く、ブルペンで少し投げさせてみたら体を痛めそうで、すぐにやめさせた」と懐かしむ。

市原監督の「秋広育成方針」は固まった。

「『この子で甲子園に行くぞ』なんて考えたら壊してしまうと感じた。だから焦らなかった。むしろ心配の方が大きかったかな」

下半身を鍛えるための手段の一つとして、よく用いられるのがランニングだ。だが、秋広の体作りの一歩目は、外野フェンス沿いなどでのウォーキングだった。「ランニングはさせなかった。体が成長途中でひざを痛めると思ったので、歩き方から始めた」

足腰の強化のためにほかに取り組んだのは、前後左右の細かい足運びが必要な内野ノックだ。「できるだけ野球の動きのなかで体作りをしたいと思った。練習ではショートも守らせて、腕を小さく振って投げるスナップスローなど細かい動作も意識づけさせたかった」と語る。

市原監督が変化を感じたのは、2年生の冬だったという。50メートル走は6秒8(2年生秋)から6秒2(2年生冬明け)になった。『「間違いじゃないか?」ともう一度計ったけど、同じタイムが出た」と市原監督も驚いたほどだ。筋肉がつきだしたと感じたという。球速は、2年生の冬は130キロ台前半だったが、3年生の夏には144キロにまでなった。

そんな秋広が、プロの目に留まったのは3年春だ。

「浦和学院と練習試合をしたとき、プロのスカウトが来ていた。左打者の秋広が左中間に打った」。その試合では投手もこなし、高校3年夏には、投手、野手両方を高いレベルでこなせる「二刀流」の選手になった。

プロ入り1年目らしくオープン戦では最初のストライクから積極的に振っていく姿が目立つ。それも、市原監督が言い続けてきたことだという。「2ストライクに追い込まれたら苦しくなるから。腕が長いので打てるゾーンは他の選手よりも広い」

ドラフト5位ながら1軍に入り、長嶋茂雄終身名誉監督からもアドバイスを受けた。巨人の高卒新人選手としては、1959年の王貞治以来の開幕スタメンの可能性が高まっている。そんな秋広を、市原監督はほほえましく見ている。

「1軍の試合に出ていること自体がびっくり。コロナ禍で外国人選手が来日できないことも彼の持っている運でしょう」

でも、秋広の力はこんなものではない。

「やっと今、自分の体を思い通りに動かせる感覚が出てきたんだと思う。ようやく彼のスタート。伸びしろだらけです」(坂名信行)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.